

# 4

## 思い出の記

薬師寺 積	吉田 政晴
大津 啓二	住本 建夫
宮田 義人	吉田 綾子
小林 一寛	土井 進
塚本 定三	片岡 正博
柴田 忠良	坂上 吉一
井上 清	原 一郎
浅尾 努	沖 岩四郎
豊島 久真男	中村 清一
栗村 敬	野上 浩志
奥野 良信	平田 衛
大石 功	渡邊 功
大竹 徹	山本 康次
鈴木 定彦	成山 康子



## 総務課調査係から総務部企画調整課へ

公衛研 30 年の走

「公衛研創立 50 周年」おめでとうございます。

新興・再興感染症や食品の安全性を脅かす事件の頻発、水質基準の改訂への対応等々、公衛研の出番が益々多くなっているにも拘らず、20 年前からの予算漸減、7 年前の大幅な定員削減と組織の縮小、そして昨年の再度の組織縮小、ここに至っては欠員不補充という状況まで発生しているとお聞きしています。

この様な厳しい情勢でありながら、織田所長をはじめ、現役の皆様が力を合わせて公衛研の機能維持を果たされていることに対して、大いなる讃辞をお送りします。

私は昭和 47 年に食品化学課に入り 18 年間、母乳や血液中の PCB や農薬を分析していたのですが、平成 2 年に故國田信治所長の勤めで総務課調査係に、悩んだ末に転身をする事になりました。研究の取りまとめや予算ヒヤ、地研関係の調整事務など、初めての事ばかりでしたが、2 年間ほどはカルチャーショックを感じる間もないほど色々な事を知ることができ、事務の方々に助けてもらいながら楽しく仕事ができたとおもいます。

その後、調査係は平成 8 年に企画情報室に改称、9 年には検査管理室長が誕生し、12 年には企画情報室が課に昇格、15 年には企画調整課に改称されました。この目まぐるしい変化の中、人員も 4 名から研究 2、行政 1、事務 1 の増となり、計 8 名体制に強化されました。

私は、調査係で 3、4 年を経過した頃、研究部門への復帰をお願いしたのですが、結局平成 15 年に生活環境部に異動するまでの 13 年間で総務で過ごすことになりました。しかしこの間、ルーチン的な事務の他に、本庁総務課と財政課への予算説明、委員監査対応、研究評価方法の検討と評価委員会の立ち上げ、将来構想検討会、インターネット整備、地方衛生研究所のあり方検討、健康危機事例の収集開始、業績集データベース化開始、公衛研の健康危機管理要領の作成、地方衛生研究所の健康危機管理のあり方検討、40 周年記念誌の編集など、記憶に残る仕事に従事することが出来ました。何れも、織田所長の指揮によるものですが、その実施部隊となれたことは、転身も良かったのかなあと回想しているところです。

現役の皆様には、厳しい状況下苦勞も一入と思えますが、益々のご活躍を祈念して、思い出の記を寄せた次第です。

公衛研には、公衆衛生部にウイルス課が新設された昭和 37 年に就職した。指導者は室長の豊島先生（元阪大教授、東大教授、ウイルス学会長など）であった。

公衛研勤務の 30 年間のうち、初めの 17 年間は、ウイルス課、後の 13 年間は食品細菌課に在籍した。

自分の、研究業績集に目を通すと、論文 85 編のうち 3/4 はウイルス関係、残りは食品衛生関係である。ウイルス課では、ポリオ、ハシカ、日脳、手足口病などに関わる研究をした。思い出すのは、1965 年秋のウイルス学会（長崎）で初めて発表したときの興奮である。「砂漠のダイヤモンド探し」の合言葉でやったフィールドワークは、すべての課員が熱中した。私にとっては、最初で最後だった OTCA（今の JICA）の短期（6ヶ月）バンコック出張も、忘れられない思い出になっている。

学位取得は、関心も薄かったし、チャンスも無かった。しかし、栗村先生が、鳥取大学の教授に就任されて「ウイルス課と一緒に研究をした人達に、学位の世話をしたい」旨の話を頂いた。関係者 6 人で協議し、お願いすることにした。その結果、私と木本さんは昭和 56 年に、上羽さんと木村さんは昭和 57 年に、昭和 58 年には前田さんと大石さんの順に鳥大医学部で学位を取得した。

毎年、腸炎ピブリオ、サルモネラ、黄色ブドウ球菌などによる食中毒事件が発生したが、食中毒事件のうち特に記憶に残っているのは、昭和 59 年に発生した辛子レンコンによるボツリヌス中毒（30 周年記念誌に詳細を記載した）で、事件後にグローブボックスを購入した。また第 1 室を区切って病原性の強い伝染病菌やカビ類を取扱うことができ、迅速遺伝子診断のために PCR もできるように、安全キャビネットを設置した。

食中毒の検査は、皆で実施したが、休日や夜間に発生した時は、公衛研に近い私が真っ先に駆けつけた。おかげで、大概の事件の概要をいち早く知ることができたし、保健所の食管や機動班員とも、親しくなれた。

國田先生が食品衛生微生物研究会の発表会長（大阪北御堂）のとき、課をあげて発表会を運営し、会長の責務を十分に補佐することができたことや、同学会の名誉会長員に推挙できたことを喜んでもらえた。

大阪府退職時に、頂いた過分な餞別は、退職記念に国産腕時計を購入したが、今も正確に動いている。

## 公衛研での38年 ～多くの人々に感謝～

宮田 義人

昭和40年4月1日～平成15年3月31日の38年間にわたり公衛研一筋に勤務しましたが、今この回想文を書くに当たって、多大な影響を受けた人々のお顔が走馬灯のように脳裏を駆けめぐっています。まず第一に浮かんでくるのは、國田信治先生です。先生とは大学4回生の夏に就職のお話を伺うため、公衛研の部長室で初めてお会いしました。修士課程の東さん、小生、同級生の大石君、島田君の4人でお伺いし、翌年の4月にこの4人が公衛研に集団就職しました。府庁での全体研修を修了し公衛研に赴任すると同時に國田先生のアイデアで前代未聞の3箇月にわたる所内研修が始まり、所内すべての課をめぐり、どの人がどんな仕事をしていて、どこにどんな測定機械が存在するのか明確に理解出来、後々非常に役に立ちました。研修終了後に微生物課への配属と同時に強引に命令されたのは、ルチンに熟練することはむろん、研究テーマを決めて2年以内に学会発表を行い論文を書くことでした。この年に河南町で赤痢の集団発生があり、富田林HCで患者・保菌者から収集された血清が保存されており、これを用いて疫学的解析をせよと命令されました。菌体凝集反応と感作血球凝集反応を用いましたが、抗原作成から抗体価測定法の確立、得られたデータの解析まで、ルチンが終わった後も遅くまで文献と首っ引きで悪戦苦闘の毎日でした。微生物課長であった北浦先生には、これらのデータから何が言えるかを徹底的に考える方法を教わりました。約束の2年間はあっという間に過ぎましたが、公衆衛生学会で発表し、公衛研所報に論文掲載してなんとか國田先生の期待に沿えたと思います。その後、桃山病院の杉山院長のお世話により、赤痢患者・保菌者の血清を採取して頂き、病日経過と抗体価の変動を解析し感染症学会で発表し論文掲載できました。このテーマをさらに継続し、RIAを用いた解析法を開発して、感染初期の血清診断、患者と保菌者の鑑別を可能にし論文発表できました。また、これらをまとめて主論文として博士号も取得できました。Salmonellaの疫学（小林先生）、百日咳の抗体解析（勝川先生）、海外渡航者下痢症の原因菌解析（阿部先生、田口先生、勢戸先生）、衛生検査所の精度管理（勝川先生）などの仕事に携わり、その度に多くの人々の助力を戴きました。振り返れば幸せな時代を過ごしました。すべての人々に深く感謝しています。

## PCR法開発のころ

小林 一寛

公衆衛生研究所創立50周年お慶び致します。その前～中期にお世話になった一人として感慨深いものがありますが、國田先生の強いサポートによって遂行した一業務、「PCR法開発のころ」を書かせて頂きます。

昭和63年9月28日、厚生省局長からコレラの取り扱いの変更が通知された。その内容はコレラ毒素産生株だけを、行政上のコレラ菌とする。地方衛生研究所で確認同定を行う、であった。これまではコレラ菌らしき細菌が検出された場合には昼夜を問わず予研へ（現在の感染症研究所）持参し、コレラ菌O1血清に陽性であればすぐに待機している行政担当部署へ電話で連絡をすることになっていた。今後はコレラ毒素まで検査をするとすると、あと2日余計にかかって輸入食品流通関係やコレラ菌らしき細菌が検出された患者の扱いなど行政上の問題が出てくる。そこで國田信治先生は、地方衛生研究所としてこれまでと変わらない日数で決定できるようにするため、府費による研究費で、各課選抜メンバーのプロジェクト研究班を立ち上げ、ハイブリダイゼーション法(Hbr)の開発を指揮したわけですが。そのためのプローブはすでにあつたのですが事情により入手できないので、コレラ菌(569B株)から毒素遺伝子をクローニングし、独自のプローブを作成することからはじめました。この研究は最終的には実を結び、今も現役で活躍されている方々の連名で学術雑誌にも公表しています。ところがこの研究中にHbrよりも簡単で、迅速な検査法がエイズウイルスの研究で行われているという記事を見つけました（医療と臨床検査、第206号、昭和63年10月15日）。それでPCR法に関するさまざまな文献を集め、國田先生に方法の説明と研究トライの相談に行きました。先生いわく「ウイルスは一つの遺伝子だけだ、DNAやRNAなど多くの遺伝子を持っている細菌でやっているのがあつたらもってこい」と「お前に300万円（増幅器で当時はほとんど普及しておらず、重要備品として本庁の許可が必要）もするおもちゃを買えるか」の2つの叱りを言われたのが記憶に残っています。しかしなんとか購入してもらいPCR法の開発も開始しました。この間、どの領域を検出するのが特

## 公衆衛生研究所へ配属された最初の頃

塚本 定三

異的かは多くのプライマーを作成し、また増幅用酵素はどれが最も効率が良いのかなど、いろいろ条件を検討しました。保存中のコレラ菌について検討した結果、エタノール沈殿程度の簡単なDNA抽出操作のサンプルで、実用可能という結果を國田先生に報告に行きました（医学の歩み、Vol.150、1989年8月2日）。この方法を意匠登録してはというような話も出て、先生が調査されたようですが、先生曰く「そうなれば、この方法は普及しない」という判断でその後、特許の話は問題になりませんでした。そして衛生研究所方式という安価（一台30万円程度）な増幅器を各研究所に購入して貰い、購入した所には実験用のマニュアルと試薬類一式をつけました。先生の手元にはどこが何号機を買ったのかリストがおかれていました。わが微生物課には第1号機が入りました。これを書いていますと、地方衛生研究所会長として「今やコレラ菌の検査は地方衛生研究所でできる」ことを中央に言うておられた責任上、結果が遅いと言う行政からの苦情は出る前に防ぎたかったのではないかと思います。あのかすれた、ダミ声がか上から聞こえてくるようです。その後DNA抽出操作も面倒であることから、加熱法を検討し、さらに腸管出血性大腸菌O157ほかについても開発し報告しています。この仕事は行政側に貢献するという衛生研究所の一つであったと自負する次第です。

公衆衛生研究所への期待は極めて大で、さらなるご発展を祈念致します。

公衆衛生研究所（公衛研）が50周年を迎えるにあたり喜ばしく思います。私は昭和44年大阪府に採用され、公衛研 食品衛生課（現 細菌課）に配属されました。課の業務は食中毒、食品の細菌検査で、私は本館3階玄関の真上あたりの室で木下善雄氏（故人）と一緒にいました。当時は室に冷暖房の設備がなく、特に夏の暑さには参りました。そのころの食中毒は夏季に集中して発生（冬季はほとんど発生がない）するため、その検査に多忙を極め、しかも狭い室で2人で細菌を扱うためパーナーをつけっぱなしの状態でした。日中の室温はたちまち40度を軽く超え、汗は滝のように流れ出ました。やむなく窓を全開にすると風が入り少しはましですが、埃が舞い込み書類は飛ばされる。それよりも病原菌が飛散しないよう、埃とともに雑菌が入り込まないよう大変神経を使い、夜遅く帰るころには精根尽きたものでした。そんな中で同年9月に枚方市主催の敬老会において配ったちらし寿司による腸炎ビブリオの食中毒が発生しました。1800名以上の患者の発生とともに高齢のこともあって3名の方が不幸にも亡くなりました。行政からの強い要望で原因を明確にしてくれとのことで、木下氏といっしょにちらし寿司の残品から原因となった腸炎ビブリオを検出したときの喜びはひとしおでした。食中毒が原因で複数の死者が出たということは現在はもちろん当時としても珍しく、食中毒の怖さを知るとともに、私が食中毒菌についての研究を将来やろうと決意させてくれた忘れられない事件でした。

話は変わりますが、当時、公衛研の宿直は私たち職員が交代で行っていました。宿直はもちろん日曜祭日関係なく年中無休、勤務後から翌朝出勤前までその間所内を2-3回巡回するもので、どういうわけか管理職の職員は免除されていました。一応宿直手当はつきますが、夕食の出前を頼むとほとんど残らない程度の金額でした。通常は3-6週間に1回程度で、年末年始はくじ引きで当たると所の宿直室で一人寂しくお正月を祝うこととなります。私は台風が来る当日に宿直が当たり、被害の電話対応など頻りにやったことが思い出されます（その後、2年ほどで業者委託となる）。

このように私が配属された当時と比較すると現在の労働環境は相当改善され、まさに雲泥の差があります。最後に平成19年に退職までの38年間、公衛研に勤務させていただいたことにお礼申し上げます。

## 食品細菌課の10年

柴田 忠良

毎年多数発生した食中毒の中で、私の記憶に最も残る3つの事件がオリンピック開催年に発生した。当時を振り返り、それらの概要を以下に述べてみたい。

平成4年、食品細菌課へ異動した4月、ゴールデンウィーク直前の28日、門真市を中心に発生した大型食中毒の洗礼を受け、休日返上の検査であった。給食弁当に入っていた「目玉焼き」に端を発し、卵製品による食中毒は2府2県に拡大し、3600人を超える患者が出た。この頃、全国的に卵によるサルモネラ・エンテリティディス食中毒が発生し続けた中の1事件ではあったが、いきなりの衝撃的な事件であった。

平成8年、歴史に残る腸管出血性大腸菌O157による食中毒の連鎖が国内を駆け巡り、5月に岡山県の学校給食に始まり、9月までに全国で22件もの集団発生が続いた。大阪府内では2件(河内長野市、患者50名、羽曳野市、患者98名)、さらに堺市の学校給食による食中毒(患者数5,591名)があり、死者まで出る一大事件となった。

事件発生直後に開催された関係機関に対する厚生省の説明会へ、江部所長に随行した。詳細は記憶していないが、堺市支援のため、厚生省は原因食品検査のため専門家を、大阪府は保健所等からの人的支援、公衆衛生研究所は検査等で応援することになった。微生物課と共同で堺市から搬入された1日約1000検体の検便検査を、同時期に発生した羽曳野市の事件にも対応しながら、1週間ほど行った。応援のための検査であったが、費用に関する研究所総務部と堺市の見解の相違から突然の中止になる、何ともまずい結果となってしまった。

この事件を契機に、O157の食品汚染実態調査が行われ、府内で販売されていた牛肉からO157が検出された。当時は未だO157の牛肉汚染の公表はためらわれていたことから、われわれの結果はすぐには行政に受け入れられず、食品衛生課長、衛生部長への報告に至るまでの協議は深夜に及び、日付は変わり、8月14日漸く公表された。

平成12年、6月27日、低脂肪乳が疑われる事件がテレビ等で大きく報道された。有症者が飲み残した

低脂肪乳からの黄色ブドウ球菌(SA)とその毒素(E)の検査を試みたが、検出されなかった。症状からSAEに違いないとの信念で、検出に向けて全員が注力した。脱塩濃縮の結果、遂に微量のSAEを数検体から検出し、7月2日に公表された。

SAEを検出したことにより厚生省大阪市合同原因究明委員会に出席することになった。厚生省の委員から原因は1つ(低脂肪乳)でなく、偶発の同時多発食中毒の集積の結果であるとの珍妙な意見が出たりしたが、原因は低脂肪乳の原料である脱脂粉乳がSAEに汚染されていたことにあった。しかし、大阪府警察の捜査(脱脂粉乳の押収など)がなければ、原因の究明はされなかった事件であった。また、大事件(患者数13,420名)となった要因の1つに、企業の危機管理への対応のまずさが指摘された事件でもあった。

いずれの事件も課員の努力で解決され、研究所の実力を証明できたと思っている。

## 私の公衛研 36 年「光陰矢の如し」

井上 清

昭和 48 年 4 月に大阪府に採用され、公衆衛生研究所食品衛生部食品化学課に配属。昭和 50 年に食品衛生部食品細菌課、平成 4 年に公衆衛生部微生物課、平成 15 年に企画総務部企画調整課、平成 19 年に感染症部細菌課と、平成 21 年 3 月に退職するまで在職 36 年間で 4 部 5 課を経験しました。

食品化学課では、振り返ってみればわずか 2 年間でしたが、貴重な楽しい思い出が一杯でした。原子吸光やガスクロマトグラフィーなど、生物系出身の私には初めて経験する機器の使用。仕事が終わって先輩と共に飲み歩いたのも懐かしい思い出です。

昭和 50 年に食品細菌課に異動し、当時問題になっていた合成洗剤の安全性について取り組みました。この中で染色体異常誘発試験を担当し、合成洗剤を投与されたマウスの骨髄細胞の染色体について、毎日顕微鏡で観察し続けました。その後、培養細胞を用いたり、姉妹染色分体交換という新しい手法を用いて染色体に対する影響を検討しました。計 5 年間にわたって、急性毒性試験、催奇形性試験、胎児毒性、突然変異試験、染色体試験など検討しましたが、結果、異常は全く認められませんでした。

その後微生物課を経て、平成 15 年には公衛研で大きな組織改正があり、新設された企画総務部企画調整課に課長として異動しました。初めて経験する行政的な仕事に戸惑いました。しかし、同じ研究職から異動した赤阪進氏や味村真弓さん、行政職の方々と共に何とか職務を全うすることができました。2 年目には織田肇所長が地方衛生研究所全国協議会近畿支部長に、そして 3 年目から 2 年間、全国協議会会長に就任され、われわれの部署がその事務局を担当することになりました。近畿や全国の衛研の方々と交流でき、貴重な経験を積むことができました。企画調整課の 4 年間でもう一つ取り組んだのが、公衛研の建て替え問題です。最終的には財政難で進展できなかったのは残念でした。

公衛研はクラブ活動も盛んでした。高校で少し野球をかじったことがあり、公衛研へ入って直ぐ野球部に誘われ入部しました。公衛研野球の特徴は、トップバッター杉浦さんが四死球で出塁、その後盗塁や相手エラーで 3 塁へ、そして 4 番西畑さん（その後宮島さん）がヒットで返す。その貴重な得点を島田投手が守りきるといって、極めて効率のいい守りの野球です。そんなチームに私も最初からレギュラーで使っていただき大変光栄でした。

低脂肪乳を原因とするブドウ球菌  
エンテロトキシン大規模食中毒事件

浅尾 努

今から約 10 年前の平成 12 年 6 月末から 7 月初めにかけて、低脂肪乳等を原因食品とする、有症者数が 13,420 名に達する未曾有の大規模食中毒が関西地方を中心に発生した。乳業界のリーディングカンパニーが起こした事故に加えて、HACCP の承認工場で作った製品であったことが、社会に大きな衝撃を与えた。企業のコンプライアンスが叫ばれ、不祥事が発生した際には、社長がテレビカメラの前で謝罪する光景が増えたのは、この事件以来ではなかろうか。HACCP の承認制度などが見直され、食品安全基本法が制定される大きな要因となった事件でもあった。

## 事件の経緯

患者の臨床症状から、ブドウ球菌エンテロトキシン (SE) あるいはセレウス菌嘔吐毒が本事件の原因と疑われた。有症者の飲み残しの低脂肪乳等から、当該菌やセレウス菌嘔吐毒は検出されなかった。公衛研は誰も経験したことがない低濃度の SE を低脂肪乳から簡便に抽出・濃縮する方法を開発し、飲み残し検体から A 型エンテロトキシン (SEA) を検出した。

事件発生当初は大阪工場（大阪市管轄）の不衛生な取り扱いにより、何らかの製造工程でブドウ球菌が増殖して SEA が産生された可能性があると報じられた。その一方で、大阪府警は配送伝票から複雑な脱脂粉乳の流通経路を解析し、北海道の大樹工場製の脱脂粉乳が大阪工場に入荷されたことを突き止めたようである。公衛研は 4 月 10 日製造 2 検体の脱脂粉乳から 4 ng/g の SEA を検出した。この製品は 4 月 1 日製造分の約半量を再生したもので、後に両日の製品とも SEA に汚染されていることが明らかとなった。脱脂粉乳の SEA 汚染の原因は 3 月 31 日に起こった停電事故のためと推定されたが、ブドウ球菌の汚染源については明確にされていない。推定された停電事故が真実の事故原因であったのか、全く異なる原因があったのか、私には分からないが、その後摘発された数多くの産地偽装事件が何らかの示唆を与えているかも知れない。

なお本事件の概要は *Epidemiology and Infection* (2002 年) に投稿し、その内容は WHO newsletter

## ウイルス課発足当時の思い出

のトップ記事として紹介された。

## 思い出

低脂肪乳から低濃度のエンテロトキシンを検出できたことを、元公衛研顧問の阪口玄二先生（大阪府立大学名誉教授）に連絡した。八雲事件（東京の小学校で発生した脱脂粉乳によるブドウ球菌食中毒事件）が発生した1955年に、阪口先生は日本の事件報道の新聞記事を英訳して、留学先のシカゴ大学のDr. Dack に説明したことをお聞きした。Dr. Dack は、菌の培養上清だけでもブドウ球菌食中毒と同様の症状（嘔吐）を発生させることを実証し、この毒素をエンテロトキシン（腸管毒）と名付けた。種々の細菌の下痢毒がエンテロトキシンと総称されるが、この用語はブドウ球菌嘔吐毒に由来する。

37年間お世話になった公衛研には数多くの思い出があるが、本事件はもっとも精神的にシビアな仕事であった。過去の経験と知識を頼りに、手元にあった器具機材を利用し、1日でも1時間でも早くエンテロトキシンを検出しなければならなかった。得られた結果に絶対的な自信はなく、再確認の時間も許されない極限の状況であった。今でも「もしもあの時」と、時々悪い夢を見る。

大阪府の衛生研究所と労働衛生研究所が合併して、梶原所長の下に大阪府立公衆衛生研究所が創立されたばかりの時期だった。当時、ポリオウイルス感染による麻痺が大流行し、また、日本脳炎も毎年患者が発生すると言う状況だった。ウイルス感染に対する対策が必要と言うことで、阪大奥野研究室助教授をしていた國田信治博士(故人)が初代のウイルス課長に、深井研究室出身の田所 順博士(故人)が研究員に招かれた。奥野研究室の助手をしていた私は、非常勤の嘱託として、当初からウイルス課の設立と研究室の設計に協力した。

翌昭和36年には数千人の麻痺患者発生を受けて、セイビン型のワクチンが緊急輸入されることになった。このワクチンは、国際的にも承認途上の生ウイルスワクチンであったうえに、日本での野外テスト抜きで導入されたので、事故対策を十分にする必要に迫られ国立予防衛生研究所(現国立感染症研究所)が中心となり、全国的なポリオウイルス対策組織が発足した。大阪では新設の府立公衆衛生研究所ウイルス課が中心的役割を担うことになり、私は招かれて、それまでの麻疹ウイルス研究を中断し、ポリオ生ワクチン対策に駆り出されることになった。東大伝染病研究所(現医科学研究所)からウイルス課に加わってくれた務台方彦博士、新井 浩博士(故人)、と田所博士、小生、旧衛生研究所時代からの光田文吉氏(故人)に数名の新人(今は退職された方々)を加えた陣容で、ポリオウイルス、ハシカウイルス、インフルエンザウイルス、日本脳炎ウイルス、その他、の研究を展開した。武衛博士(蚊の専門家)が加わったのはいつだったか？

國田課長(後所長)が厚生省からの研究費を獲得し、大阪府がそれに十分見合った研究費を準備して対応してくれると言う好循環の下、大学にも勝ると自慢の研究室を立ち上げ、活発な研究を行った。新しいウイルス課の立ち上げと、ウイルス感染症対策に対する真正面からの取り組みに、若手研究員も、実験補助に勤めて下さったお嬢さん方もふくめ、一丸となって取り組んだあの頃の熱気が懐かしく想い出される。



## 感謝と期待

## 公衛研での14年間

栗村 敬

奥野 良信

創立50周年、おめでとうございます。

経済繁栄の陰で公害問題たけなわの1970年6月に大気汚染のひどい森の宮に就職させていただき7年3ヶ月間お世話になりました。その前までは“Man on the Moon”で沸き立つ米国の雰囲気を送っていましたが、公衛研時代の方が、はるかに密度が濃かったと感じています。それは、次から次と社会を不安に陥れる事件が発生し、対応に追われたからではないでしょうか。見方を変えれば、直接、社会に役立つ仕事ができ、やりがいを感じたからではないかと思っています。

この14年間だけでも、数多くの新しい感染症が出現し、公衛研を挙げて対応に当たったことが思い出されます。1999年のニューヨークを発端としたウエストナイル熱、2003年の中国から始まったSARS、2003年から始まり今も続いている高病原性鳥インフルエンザ(H5N1)の流行などが主なものです。しかし、私にとって強烈な記憶として残っているのがセアカゴケグモ騒動です。

私が公衛研に勤務するようになって2年後の1995年の11月、府下の高石市でセアカゴケグモという熱帯の毒グモが大量発生し、パニックになりました。セアカゴケグモの毒性が早く知りたいという府民の要望に応えるため、当時の医動物室が中心となって必死に試験を行いました。10日後に検査結果が判明し、記者会見で発表した内容が新聞記事で、「毒グモ、たとえ100匹にかまれても致死性まずありません」と掲載されると、うそのように騒動は治まりました。その時、何が起こっても対処できる公衛研の実力を垣間見た気がしました。

私にとっての公衛研は、公衆衛生の重要性を教えてくれた先生のような存在だと感じています。大学時代にも公衆衛生学的研究の一端に関わりましたが、公衛研時代こそ、公衆衛生の真髄を学んだ気がします。社会で何らかの不安要因が生じた時、最後に頼りにするのは科学的検証に基づいた真実です。ここにこそ公衛研の存在意義があり、公衛研を離れて外から見えてくるものでした。

その中でも、大学の研究室では到底得られなかった経験は自分が本当に感染症の現場を垣間見ることができたことです。毎週のように町に出て、保健所・学校・患者宅を訪れて病気をしたり、大学では望めない皆の意見を聞くことができたのは幸いでした。この点が欠けていれば大学の研究室、または、検査所にいるのと変わらなかったことになっていたと思います。また、インフルエンザウイルスの抗原解析に必要なフェレットを米国から輸入するようなことも認めてもらったのも貴重な思い出です。現在の公衛研を見て感じるのは、閉じこもりがちで町に出て病気に接することが少なすぎるということです。自ら外に出て説明すれば今では難しいといわれる疫学に必要な採血などは簡単に認めてもらえるといえるでしょう。後で責任を問われないように書類を作るという形式的な事ばかりに時間をとられているのがどこでも見られる現象のような気がします。

最近、道州制の必要性が叫ばれていますが、感染症の広がりには境界がないことを考え、さらに、新たな病原体の出現、薬剤耐性微生物の増加などを考えると府単独の機関として管轄地域社会に対応する時代から、地域一本化し感染症対策をグレードアップすることが住民の望むところとなる時代となってきたと思いますし、研究所の更なる発展に資するでしょう。

最後に、これまでの研究所の維持・発展には事務系職員の方々による支える力が大きかったことを記し、遅まきながら感謝の意を表します。

私がウイルス課長として公衛研に赴任したのが1993年で、2007年に定年退職しましたので、ほぼ14年間在籍したことになります。それまで、20年以上にわたって大阪大学微生物病研究所で研究生生活を送っていましたが、公衛研時代の方が、はるかに密度が濃かったと感じています。それは、次から次と社会を不安に陥れる事件が発生し、対応に追われたからではないでしょうか。見方を変えれば、直接、社会に役立つ仕事ができ、やりがいを感じたからではないかと思っています。

私が公衛研に勤務するようになって2年後の1995年の11月、府下の高石市でセアカゴケグモという熱帯の毒グモが大量発生し、パニックになりました。セアカゴケグモの毒性が早く知りたいという府民の要望に応えるため、当時の医動物室が中心となって必死に試験を行いました。10日後に検査結果が判明し、記者会見で発表した内容が新聞記事で、「毒グモ、たとえ100匹にかまれても致死性まずありません」と掲載されると、うそのように騒動は治まりました。その時、何が起こっても対処できる公衛研の実力を垣間見た気がしました。

私にとっての公衛研は、公衆衛生の重要性を教えてくれた先生のような存在だと感じています。大学時代にも公衆衛生学的研究の一端に関わりましたが、公衛研時代こそ、公衆衛生の真髄を学んだ気がします。社会で何らかの不安要因が生じた時、最後に頼りにするのは科学的検証に基づいた真実です。ここにこそ公衛研の存在意義があり、公衛研を離れて外から見えてくるものでした。

12年の間には、ウイルス課をはじめ他の部課の多くの方々と知り合い、楽しく過ごさせていただきました。苦しい時もありましたが、その時は、森之宮の飲み屋に立ち寄り、皆で一杯やると忘れることができました。今後、公衛研がどのような姿になるか想像できませんが、府民の安全、安心を守るため、更に発展されることを祈っております。

最後に、これまでの研究所の維持・発展には事務系職員の方々による支える力が大きかったことを記し、遅まきながら感謝の意を表します。

## 50周年によせて

大石 功

公衆衛生研究所（公衛研）の創立50周年、誠におめでとうございます。私が入所した1965年（昭40年）は、創立から丁度5年目にあたりました。配属されたウイルス課では、大阪万博を5年後に控えて日本脳炎の予防対策が進められていました。同課では、TC（組織培養）、メディウム（培養液）、サプライセンター（実験器具の管理室）など初めて耳にする英単語が日常的に使われていて、新しい専門分野に踏み入れたことを実感したものです。課では長らく腸管系ウイルスの診断や疫学調査に携わり、感染性胃腸炎の病原ウイルス検出のために“視力を尽くして”終日電頭を見続けたこともありました。腸疾患に限らず諸先輩のご指導のもとに様々なウイルス感染症の経験も果たし、退職前の数年間は病理課（現ウイルス課）でHIV/エイズの課題にも取り組みました。こうして在職中に培った多様なウイルスの診断技術は、退職後に赴任したJICAケニア中央医学研究所/感染症プロジェクトの国際舞台で存分に生かすことができました。

在職中は公衛研の内外を問わず色々な分野の人達との出会いがありました。殊にノロウイルスの遺伝研究を通じて懇意になったエステス教授（ペイラー医科大学）から1993年にPCRプライマーの分与を受けて、遺伝子検査に着手しました。また1995年にはCDC（アメリカ疾病予防管理センター）のウイルス胃腸炎研究室で、グラス室長からノロウイルスの遺伝的分類法の手ほどきを受けました。このような分析技術は、公衛研で世界的に知られるKY/89ウイルス株を生み出す原動力となりました。

さて、私の手許に1966年（昭41）大阪で開催された第7回臨床ウイルス談話会（現学会）の謄写版印刷による抄録が残っています。会長はのちの國田信治第三代所長でした。主題は“ウイルスの疫学研究”で、当時各地の研究機関で進められていたウイルス感染症の発生や分離ウイルスの動態を集積し解析する全国組織の将来像をめぐって、議論が交わされました。やがて1997年に国立感染症情報センターが設立されましたが、この研究会から実に30年ものちのことです。

公衛研では平成9年に科学広報誌「公衛研ニュース」を発刊されて間もなく50号を迎えられるとのことです。第1号の発行に関った一員として、10年以上にわたって編集に携わってこられた皆様に心より敬意を表します。

これからもアップデートな科学情報の提供をお願いするとともに、公衛研のさらなる発展を祈念致しております。

## 36年間の公衛研

大竹 徹

36年間の公衛研生活を終えて3年が経ちますが、思い出すのは不思議に仕事仲間との「遊び」のこと。

ずいぶん若い頃のことですが、夏の盛りには、暑い大阪を抜け出して京都は貴船の谷に車で出かけ、美味しい弁当を食べさせてくれるお店で涼しい空気を満喫。これはある時期毎夏の恒例行事になっていました。夏といえば、職場でのビールパーティ。終業時間が過ぎると、部屋には鶴橋で調達してきたチヂミなどの「ご馳走」が用意され、わいわいがやがやと遅くまで騒いだものです。アルコールがからっきしダメな私もしらふで酔えることを知ったという訳です。しかし、いつのころからか、職場での飲酒は禁じられてしまいました・・・公衛研もそのころは「自由な」あるいは「のんびりした」空気に充ちていたように思えますが、それは古い世代の者たちが感じる感傷なんではないでしょうか。

根っからの音楽好きな私の忘れられない思い出は1988年ごろ、職場で気楽に音楽を楽しもうと有志を募って、リコーダーアンサンブル「アンサンブル・ラルゴ（通称笛クラブ）」を結成し、年に数回の「昼休み30分コンサート」を始めたことでしょう。男女6人のメンバーは学生時代から楽器の演奏経験があり、音楽をしたくてうずうずしていた連中ばかり。はじめのころは練習もけっこう熱心に毎週やり、コンサートを楽しみにしてくれる固定客さんも出来て、職場にいいリフレッシュ時間がもたらされたのでは、と思っています。特にクリスマスには、「サンタが街にやってきた」などクリスマス音楽を10曲以上もメドレーで演奏して、集まっていたいただいたお客さんといっしょに年末を感じたものです。最近ではメンバーもそれぞれ仕事が忙しくなり、活動も鈍りがちなようで、ちょっと残念なことです。先輩の先生からうかがったことですが、公衛研の創成期にはりっぱな「マンドリンクラブ」があり、各地に慰問コンサートに出かけるほどの活躍をされていたということで、「職場」にも「社会」にもこういった心の潤いが得られる機会と雰囲気が必要ではないでしょうか。

もちろん、仕事についても忘れられないことはたくさんあります。1970年代に問題になった環境汚染物質の生体影響について、動物実験を飽きる事無く繰り返したこと。さらに新興感染症として世界に広がったエイズの検査体制あるいは治療薬や疫学の研究を全国に先駆けて、上羽昇先生や現在活躍中の森治代先生たちとゼロから立ち上げ、走り続けた忙しくも充実した時間は私の人生に重みを与えてくれています。今では仕事を通じて出会った方々に感謝の念でいっぱいです。

## 私を育ててくれた公衛研での12年

## 思い出

鈴木定彦

私が公衛研にお世話になったのは平成3年4月から15年3月までの12年間でした。最初の仕事は全く畑違いのラットを用いた窒素酸化物および浮遊粒子曝露の影響により肺に特異的に出現する蛋白質の検索でした。当時の魚住公衆衛生部長の指導の下に、守衛室のとなりにあった動物曝露実験室に100匹以上のラットを飼い、肺胞洗浄液を集めては蛋白質の分析を繰り返していました。この時に最も印象に残ったのは曝露装置を自らデザインし、正確な実験ができる様にした部長のアイデアでした。これと同時に研究していたのは、今も私の最も重要なテーマの一つである結核迅速診断法でした。この研究は当時の牧野微生物課長らとの共同研究として始めましたが、その後宮田微生物課長にお世話になり、現在も主任研究員の田丸さんらと共同研究をさせていただいております。また、当時の柴田食品細菌課長にお世話になり、私の自然免疫因子研究を発展させていただく事が出来ましたことにも大変感謝しております。私が何よりも感謝しておりますのは、病理課の課員であった私が課の業務とは別の研究をする事をお許し下さり、ご助言までもいただいた歴代の上羽課長、大石課長、大竹課長です。

現在のウイルス課長である加瀬さん、現在の企画調整課長である木村さんらとともに企画した「牟岐セミナー」も最も私の記憶に残るものの一つです。このセミナーは、ウイルス課を定年退職された木本主任研究員の我々に対する研究やその他の面での良い影響を若い研究者に伝えたいと考え、公衛研の中の有志を募って合宿形式で行ったものでした。「牟岐セミナー」の「牟岐」は木本さんの出身地の徳島県牟岐町のこと、時には大人数でそこにある木本さんの生家まで赴いたものでした。「牟岐セミナー」での勉強会の白熱した議論は時には夜中まで及び(途中からお酒が入った事は言うまでもありません)時を忘れたものでした。この会を通じて、参加した職員間のより深い連携が出来たのではないかと考えております。

野球部の玄関前でのキャッチボールと試合後の「餃子の王将」での反省会、卓球部の練習や試合、親和会の数々の行事、他にも私の公衛研での思い出を数え上げれば枚挙に暇がありませんが、一つ確実に言える事があります。それは、公衛研での12年間が私を研究の面でも、人格の面でも育ててくれたと言う事です。その様な公衛研の今後益々の発展を祈念いたしたいと思っております。

公衛研を退職して15年になりますが、日々の業務で遭遇した事例の中に今でも忘れられないものが在ります。思い返しますと、公衛研食品化学課は高レベルで強力な化学分析力を介して社会に密接に貢献していました。時に、我々が分析室でイメージしている反応を超えた社会からの応答があった時に、その記憶が強く残ったのだと思います。

例えば、極低濃度の分析力が必要なダイオキシン類の母乳中濃度の結果を学会発表した時は、報道機関は大いに注目して殺到し、WHOなど国際的動向ともシンクロしたこともあって、国の規制強化に繋がったようです。府庁の大広間で衛生部長はじめ御歴々を前に経過説明したことや、その後環境省関連の燃焼生成物等健康影響調査検討委員会で世界のダイオキシン関連の動きを翻訳報告した事が思い出されます。

分析結果の評価が困難な事例として即席麺中のポリソルベートの検出を思い出します。マスコミや外国の製麺業者が来訪し、苦情を聞いた記憶があります。また、我々の分析力をもってすれば問題ない事例でしたが、高槻市近辺の幼稚園児が給食に異臭を訴え、当課が病牛肉の識別に屠畜場で使われるクレゾールを検出した事により、鹿児島県の大規模食肉販売会社が大阪府警に摘発され、全国的報道となりました。分析法が未完成で、開発から手がけた事例もあります。地方衛生研究所全国協議会の仕事として、全国地研と協力して食品中食物繊維を分析し、担当者の努力もあって日本食品食物繊維量表をはじめて完成し、続いて日本人の摂取量の経年変化の分析、さらに国による日本人の食物繊維摂取基準の策定に繋がりました。所長國田先生にほめて頂きました。

私は隣接の成人病センターで妻を亡くし、公衛研は悲しい思い出ですが、退職時に國田先生から慰労のお言葉を頂いたことは今でも忘れられません。現在は、千の風になってあの大きな空を吹き渡るための練習を群馬県の高崎山を中心にパラグライダーでやっており、最近は+1000m程度の上昇では満足できなくなりました。

同僚だった皆様への感謝と共に、現食品化学課には分析技術の更なる向上と、府民の健康への貢献意欲の確立に向けて更に上を目指して行かれる事を祈っています。

## 日々思うこと

田中 之雄

公衛研50周年おめでとうございます。私は昭和45年から平成20年までの38年間公衛研に在籍しました。退職後は社団法人の食品検査機関に勤務しながら、最近になって地域医療にも携わっています。退職後わずか約2年ですが、実感といたしましては遠い過去のような感覚があります。私の38年に及ぶ食品化学課での仕事を振り返りますと、最初の高度経済成長期の10年は、いわゆる食品公害問題に明け暮れました。次の10年は腰を据えて解決すべき研究課題に取り組む事が出来ました。平成の時代に入ると、バイオテクノロジーをはじめとする技術革新がどんどん仕事に活用されるようになり、平成のバブルがはじけた後は、健康危機管理等の業務に取り組みました。

今は公衛研を外から眺めています。メラミンの加工食品汚染や新型インフルエンザ関連といった健康危機管理事例についてメディアを通じて情報を得ています。公衛研を外から眺めて感じましたことは、公衛研からの情報発信がほとんど府民に知られていないという点です。例えば、昨年5月の新型インフルエンザに関する情報が厚生労働省レベルでも充分でないため、府民が右往左往したように思います。調査研究の充実を改めて指摘する必要はありませんが、府民が知りたい情報をいち早く正確に伝えることの重要性をつくづく感じました。また、食の安全・安心情報の発信・啓発に関しても、ノロウイルスによる食中毒や感染防止策等がひろく浸透していないのが実情です。

地域医療に携わって強く感じたことは、疾病の予防といった観点からみれば、食事・運動・睡眠といった生活習慣を正せばかなりの部分で効果があると考えられているにもかかわらず、循環器疾病や糖尿病患者さんに対して食事・運動等の生活習慣の改善指導や啓発が充分なされておらず、生活習慣を正さずに薬物治療のみに頼っているという実態があります。

以上述べたような情報発信・啓発は主に行政が担ってきた事業ですが、公衛研は市町村の保健センター等の行政機関と協力しながら行えば、素晴らしい成果が得られるものと考えています。

一OB職員が日々思うことばかりを書き綴りましたが、公衆衛生研究所の今後ますますの発展を祈念いたしております。

## 衛研での思い出に与する一言

吉田 善彦

衛研創立50周年記念に当たり、ご関係の皆様方と一緒に心からお祝いを申し上げます。何かと問題多き昨今、日々研鑽に励まれている傍々のご努力を心強く頼もしく存じています。

小生もOBの一員ですが定年退職後、早15年経過と言うところで、府下の辺境にて一府民として、日々少なからずの関心を寄せて居ます。

翻って薄れ行く在職当時を思い出に、先ず40数年前の就職間もない当時、戦前派の先輩氏が引用した何処か大国の格言に「良鉄釘と成らず、良民兵と成らず」とか言うのが有る？そうにて。当該氏はそれで文系指向でしたが理系に選択を換えたと言うお話を聞かせて頂いた。片田舎山村育ちで超一兵卒の小生には、今でも記憶に残る言葉です。幸いにも我々にとって平和な世になったので、お陰様にも期間1杯の在職と、その後の今日までの平穩無事な日々を送らせて頂き平和の有り難さを感じています。

尚、衛研在職中は一時府立の他研究機関の傍々と“食品残渣の取り扱い”等々の共同研究に参加した以外は、食品添加物関連物質等の汚染監視関係の仕事を30年余担当しました。衛研退職後10年余、一般市販の医薬品と称する化粧品絡みの商品製造所にて添加済み成分の検証試験に同様に従事した。その後、化学試験絡みの仕事から離れ、現在ではよくも30有余年間も働かせて頂いたものと感謝々々の心境です。

有閑人となって、当該地 保健センター推奨、地域住民対象の“健康づくり食生活改善協議会”なるボランティア活動(健康体操教室、健康料理教室)に、食べもの名に食指を惹かれ、2年余顔出しをしました。只、現在同好会活動として、引き続き参列中で、リーダー・指導者が途中病氣入院等の際も我々落第坊主主催で自習活動として行っています。更に移り色気を出し、仲間の跡付きにて“森林ボランティア”活動に出頭致し、竹炭焼き、竹酢液の蒸留云々で童心に帰り、山奥育ちの山猿気分満喫中です。引き継いだ老朽炭焼き窯の更新云々の頃には小生も入院最終章に成るのかなと思っている処です。

## 公衛研の思い出

吉田 政晴

私が公衆衛生研究所にお世話になった1969年、それは大阪万博の前年で、関西や日本が輝いていた年でした。しかし反面、大気汚染が大きな問題になっていて、冬の朝などスモッグで環状線の電車から、大阪城が見えない日が何日間ありました。大阪府も「ブルースカイ計画」を発表していました。配属された部屋は、食品添加物と容器包装試験を主たる業務にしている食品化学第1室で、矢田室長、今井田さんが率いる部屋でした。本庁依頼の収去検査と民間依頼の検査で結構忙しい部屋でした。当時は食品からの保存料検査は、大量のエーテル溶媒を使用する方法であったために、夏の収去検査では、溶媒を吸ってふらふらになった経験があります。部屋が受け持つ検査項目はバラエティーに富んでおり、いろんな手法を駆使する部屋でした。矢田室長が湿式法による重金属のキレート分析やヒスタミンの比色定量を行うのにホールピペットを2～3本手にして、非常に手際よく分析をやられていた、その手技の正確さは特に印象に残っています。研究としては、分析法を確立するための検討が主たるテーマで、ある意味で化学分析の醍醐味を味わってきた時代でした。今は、あまり複雑な分離操作を経ずに質量分析計で定量を行う方法が主流で、キョウ雑物の影響もなく、正確にマススペクトルの情報から目的物質を把握し定量を行う、良い時代になってきことを考えるに隔世の感があります。

仕事以外の思い出と言えば、所内ソフトボール大会があります。食品化学は若手が多く、A、Bの2チームがエントリーし、他課との対抗戦よりもAB激突の試合に燃えたこと。講堂でのクリスマスパーティーでは、模擬店に出入りの給食屋「文鳥さん」に頼んでオデン屋を開店、出し物として女装で「フラダンス」を踊ったこと。野球部では、春秋2回の三衛研大会(国、大阪市)職員課主催の庁内大会で準優勝したこと。また親和会主催卓球大会、真田山でのテニス大会や合宿などが懐かしくかつ楽しい思い出として残っています。仕事よりアフターに情熱を燃やした私の公衆衛生研究所時代だった気がします。今、民間会社に勤めて感じるのは、公衛研が世間から大変期待されていることです。微生物や理化学など、あらゆる専門家が一つ建物に同居して日々研鑽を積んでいる組織を考えた場合、当然といえば当然だと思います。今後もますますの発展を期待しています。

## 公衛研の人

住本 建夫

公衆衛生研究所で働いているのを自覚した事は何回あるだろうか。昭和48年に公衛研に勤務しましたが、4月に千葉ニッコーの水島工場で脱臭工程中の熱媒体漏洩事件が発覚しました。出荷された油脂中のジフェニールの分析のため、勤めてすぐに夜の8時、9時まで、言われるままに作業を手伝いました。その時NHKの取材があり、天秤で何かを量っているところが、テレビで放映されました。後日、就職後の挨拶のため大学へ行った時にその話になり、「テレビにちゃんと写っていたので、すぐに分かったわ・・・」と言われ、何か一人前の社会人になった気分になったのを覚えています。昭和63年から地方衛生研究所の共同研究と言うことで、食物繊維の測定やその分析法の検討を行いました。当時の國田所長が地方衛生研究所全国協議会の会長をされていた事もあり事務局として実験計画を立案しましたが、全国55カ所の研究機関から実験結果のレポートが一手に集まり、実験の解析とその報告書を作成させていただきました。また、近畿の衛生研究所の会議等に出席すると必ずとっていいほど「大阪さんはどうですか」と意見を求められることが多かったようです。これらの事は大阪府立公衆衛生研究所に勤めているからこそであると思います。公衛研と関係なく自分の知識と努力で研究を行っていると考えている人もいますが、その発表では必ず他の人からは公衛研の人として見られています。公的機関の中でも公衛研のような大きな組織は専門家になるのに有利ですし、またそのことによりマスコミへの露出も多くなります。それがまた公衛研のネームバリューを上げています。

公衛研を退職しましたが、新しい職場で検査研究と関係のない人からもテレビや新聞での報道から公衛研の人として親しげに話しかけられます。中国餃子中毒事件や残留農薬の話だったら盛り上がるのですが、新型インフルエンザの話だったりするのです。退職してからは公衛研と関係なく生きていこうと考えていましたが、仕事では「公衛研ではどうしていましたか？」のような聞かれ方をするし、縁は切れないです。反対に「公衛研ではこうだった。」と言わなくてもいいように自分のレベルアップをして、自分の意見を言いたいと考えています。それにしても、マスコミで府立公衆衛生研究所の名前がでると嬉しく感じるものです。これからも存在感のある研究所であり続けて欲しいと思っています。

## 公衛研に感謝！

吉田 綾子

私は、1975年に公衛研に入り、最初、食品細菌課に新設された毒性試験を担当する部署に配属されました。当時、台所用洗剤に催奇形性などの毒性が認められたという発表があり、社会的関心が高まっていたのですが、その真偽を明らかにすることが、主な業務でした。それまで、私は動物実験の経験が全くなかったため、話を聞いても文献を読んでも知らない事だらけで、辞書や教科書とにらめっこの毎日でした。先輩の皆さんに、薬物投与の方法、解剖の手順、病理標本の作り方など、一から教えて頂きながら、本当に密度の濃い3年間を過ごしました。後から振り返ってみると、この時、いっぱい勉強させてもらえて、とてもラッキーだったと思います。

その後、食品化学課に移り、退職までの25年間、食品添加物の仕事をするようになりました。新しい仕事に変わってまず驚いたことは、検査の多さでした。毎月の収去検査に加え、保健所や食品衛生機動班で行なわれた検査の確認検査が不規則に入り、更に府民から苦情のあった食品の検査や、社会的に問題になった物質の調査・検査などひっきりなしでした。一方で、不測の事態に備えて、分析法の開発や実態調査などの研究も必要で、そのための時間をどのようにして捻出するかということが、いつも問題になっていました。とにかく忙しい毎日でしたが、社会から必要とされているという充実感もありました。毒入りワイン事件の時に、徹夜で分析法の検討をしながら検査したことや、エビ中に検出されたホルムアルデヒドの原因を探究したことなど、一生懸命に過ごした日々を懐かしく思い出します。

また、仕事の合間を縫って、色んなことも楽しみました。野球部のスコアラーをさせて頂いたことや、全所あげての卓球大会、ソフトボール大会、テニス部活動など挙げればきりがありません。充実した時間を送らせてもらい、第二の人生の基礎を作ってもらったことに感謝し、公衛研が、さらに大きく発展していくことを楽しみに見守っていきたいと思います。

## 創立50周年に想う

土井 進

大阪府立公衆衛生研究所(公衛研)が大阪府における保健衛生行政を科学的・技術的な面から支える中核機関としての大役を果たし続け、本年、創立五十周年を迎えられますことは、誠にお目出度く心からお祝い申し上げます。

平成4年4月に公衛研薬事指導部長の辞令が発せられ、私が三十有余年に亘り大阪府に勤めさせて頂いた最後の場所となりました。

薬事指導部は、昭和36年のサリドマイド副作用問題等の反省から国における医薬品等の承認審査の厳格化が図られたので医薬品企業を多数抱える大阪府として殊に中小企業の指導育成、規格試験法の作成を含む承認申請書作成指導等を行う機関として昭和41年4月に公衛研内に設置されました。

このような経緯を知る私が薬事指導部に席を置き、部員の皆様を見るとき、真面目、素直、研究熱心な良い人達ばかりでしたが、組織的な発想が一寸不足しているのかなと感じました。この組織的な発想が加われば鬼に金棒と思い、嫌われるのを承知の上で皆で話し合いを重ね、皆さんも本当に良く理解をし、業者に対し誠に親切に適切に指導をして頂き、多くの方から感謝の言葉を頂いたことを思い出します。

また、部長室等で業者の方々とは話す内に、小企業が製剤学に弱いことが判り、知人に製剤研究者が居たことから早速企業主導の大阪医薬品製剤研究会を立ち上げ、民・学による勉強を実施、薬事指導部の皆は快くその裏方を務め、この勉強会への参加企業から大変喜ばれました。

そして忘れられないことは、私が小町喜男所長先生の下で仕事が出来たことです。小町先生は、誠に造詣が深く、何事にも広い視野で的確にご判断を下され種々ご指導をして頂きました。本当に有難う御座いました。

いま国民・府民は、安全・安心を求めています。政治・行政がこれに応えるには、科学的・技術的支援が絶対条件と思います。正に公衛研の出番であります。

大阪府立公衆衛生研究所のさらなるご発展を祈念いたします。

## 定年退職後

片岡 正博

約40年前、私は公衆衛生部病理課に配属されました。ある日、日本脳炎の疑いのある患者さんが死亡されたとの連絡があり、ウイルス課の人に同伴して試料採取に行ったのが私の最初の仕事でした。死亡されたのは、当時私と同年代の若者で、粗末な納屋の様な病室のベッドの上で安置されていました。部屋の外では落胆された母親の姿が今でも忘れられない強烈な記憶として残っています。合掌後、……して、脳組織を採取、確定診断。その後、PCBの生体影響調査の一環として、実験動物の母子に与える影響を検討。母乳中や生体組織中に残留するPCB濃度とそれを構成する異性体の検討。窒素酸化物( $\text{NO}_x$ )と気管支喘息の関連について、PCA反応による $\text{NO}_x$ 暴露とアレルギーの検討。1980年代前半、新技術として遺伝子工学とかバイオテクノロジーの文言が新聞紙面を飾っていた時代に、単純ヘルペスウイルス(HSV-1型、HSV-2型)の型別によるSTD(Sexually Transmitted Disease, 性病)としての疫学調査を分離株のウイルスDNAを抽出後、制限酵素の切断パターンによって型別診断して実施しました。

病理課から薬事指導部に移って、府立5病院における医薬品の保管管理から患者へ投与されるまでの実態調査と成分分析。次に、漢方製剤を構成する生薬の新しい効果を見出すために、アレルギー反応機構を備えたラット好塩基球白血病細胞(RBL-2H3 cells)を用いて検討しました。

多くの専門分野が集まった知的集団である公衆衛生研究所の中で、定年退職まで単一料理を食べ続けるのもいいですが、様々な料理を食べるのは健康にもいい。何より、自然科学に対する視野が広まり、定年後の生活の質(QOL, Quality of Life)を高められると思います。若い時に様々な事を経験しておくことは、ボクシングのボディーブローじゃないけれども、後でじわじわと効果が現れると感じる今日この頃です。

大阪府立公衆衛生研究所における  
現役時代の思い出

坂上 吉一

大学を出て31年間、大阪府立公衆衛生研究所(公衛研)で薬事関係の仕事に従事した日々の思い出を以下に述べたいと思います。公衛研に入った当初は、勤務時間が早く終わることばかりを考えておりました。今から思っても、勤務して数年間はただ単に仕事をこなしているだけでした。数年後、やはりこのままでは駄目と思い、曲がりなりにも研究がしたいと言う気持ちになりました。しかし、現実は厳しく、容易なことではありませんでした。なんとか学位を取得するまで(学位はあくまでも仮免許のようですが)、約10年間が必要でした。ルーチン検査の合間の日々の積み重ねと数人の助けてくれる方々のおかげでした。その当時の公衛研は(いや、そのような時代だったと思いますが)、現在の公衛研のおかれている事情とは少し異なり、時間を有効に使えば、日々それなりに充実した研究が出来たのではと思います。なお、学位取得後も、毎年コツコツとささやかですが、研究成果を積み重ねることが出来ました。その積み重ねの中で、研究者並びに教育者としての道に進める機会があり、現在に至っているのも、公衛研に在籍していたおかげと思っています。

継続は力なりと言いますが、どんな些細なことで日々積み重ねることで、それなりの成果が得られるものと思います。小さなことからコツコツとこれが出来たのも、その当時の公衛研の比較的自由的な風紀の賜物であったと今でも思っております。人間は小さなことからコツコツとやることにより、ある一定の年月が経過したとき、思わぬ成果が得られることがあります。このことは、私が退職する2005年3月に行われた公衛研セミナーの場でも力説しました。

私の場合、定年の6年前に早期退職しましたが、公衛研を外から見たとき、特に最近の公衛研のホームページを拝見したとき、各職員の外部に向けての活躍は素晴らしいと思います。公衛研の諸氏が、日常業務をうまくこなすとともに、時代に即した日々の研究活動にも積極的になり、今後の公衛研を支えて行かれることを期待しています。現在、早期退職し5年が経過しましたが、若い時より公衛研で小さなことからコツコツとやっていた時期が懐かしい限りです。最後に、外部に出て、公衛研の良さがより分かって来るのも本音です。これで、私の公衛研における現役時代の思い出を終わります。

## 公衆衛生研究所の創立当時の思い出

原 一郎

公衆衛生研究所(以下、公衛研と略)の創立から、早くも50年が経過して、創立当時のことを知る人も少数になったので、私の記憶する思い出を記しておきたい。

公衛研は、衛生部所属の衛生研究所と、労働部所属の労働科学研究所が合併したものであるが、ともに老朽化した庁舎の改築計画が合併の背景にはあった。特に、私が1948年5月に入職した天六近くの労研、その後、移転した旭区大宮町の建物、いずれも研究施設に相応しいものではなかったため、新しい施設への移転には大きな期待と喜びを感じていた。

しかし、合併する衛研と労研の一般所員の間には、それまで殆ど交流はなく、いささかの違和感がなくはなかった。両者の業務内容は、労研は研究業務が主体、衛研は検査業務が主体であったが、衛研の所員の中には研究指向への強い願いが潜在していたようであった。殆ど疎遠であった、両者が緊密・一体の関係に到るには、次の経過があったように思われる。

一つは、両者が大阪府職員労働組合の衛生支部の「公衆衛生研究所分会」として、一つの組織になり、ここで活発な討議・交流が進んでいった事である。

もう一つは、発生経緯は定かでないが、中島泰知(労働衛生部)・西岡 一(公衆衛生部・水質課)の二人によって、それぞれの業務内容の紹介と、研究活動の進展のための方策が討議され、これが広まっていった事である。

公的には、合併2年半後の1963(昭和38)年2月に第1回の所内研究会が開催され、所内全般の業務・研究についての情報交換・交流が本格的に始まったと言えよう。

加えて、卓球・囲碁などの趣味による交流、さらに管理職を含む全所員による親和会の結成・活動は、まさに公衛研の一体化の完成を感じさせるものであった。

私自身も、電子複写オフセット印刷工の皮膚障害の原因調査の過程で、エッチング液にニッケルが含まれていることを、山本義彦先生(化学課)に見出して頂き、合併6年後の1966年に「ニッケル皮膚炎の症例」として共同発表を行なった。その後、特にPCB中毒問題については、食品衛生部の榎本・薬師寺先生らとの緊密な共同研究によって、大きな成果を得ることができた。

## 40万円の攻防

沖 岩四郎

弱エネルギー・低放射能測定のための米国P社製「液体シンチレーションカウンター(液シン)」が入荷し、初期トラブルも無くホッとした頃、輸入業者から一本の電話が入った。

「東京税関の人が液シンを見せて欲しいと言っています」「何のために?」「さ～?沖先生に液シンのことを教えてほしいのと違いますか」という返事を浅はかにも信じて、その税関の人と会った。

開口一番「我々は国産品を使ってもらおうという使命を持っています!」と切り出されて、調子が狂った。「同じ性能の機器が国産品で有るのに、外国製を買うのはいかがなものかと関税を掛けることにしています。」と脅かされた。

「日本では残念ながら、P社の液シンに相当する製品はないです」「いや、あります!」とここから、使命感溢れる税関の人とのチャンバラが始まった。

専門的な話しは省略するが、相手は液シンのことにめっぽう強く「お主出来るな!」という感じで渡り合った。

私は全く知らなかったのだが、日本有数の電気機器メーカーの一つが、液シンの国産に成功した、ということだった。彼はこのメーカーから液シンに関するご進講を受けてきたので、やけに詳しいのだと察しがついた。

彼が出してきた国産のスペック(性能表)を見せられて絶句した。P社のスペックをそのまま写したとしか思えない数字が見事に並んでいる。このスペックが公表されている以上、税関としては同じ性能の機器であると考えざるを得ないという彼の立場は私にも理解できた。

こうなったら、こっちも必死だ。非課税を認めてもらえるよう反撃に転じた。ちなみに「課税されると40万円!」という数字が今でも耳に残っている。

相手がメーカー側の論理で武装しているのなら、こちらはユーザーの論理で攻めることにした。研究者には「一号機は買うな。試作品を安く買ったら故障対策のモルモットにされる、という鉄則がある。」などなどと国産品を避けた理由を熱く述べたことを覚えている。

幸いこの件は非課税の通知を受けることが出来た。さらに、この国産の液シンは一台も出荷しないで生産を中止してしまったそうだ。

ちなみに私の家ではこの大手電気メーカー製の家電は買わず使わずの家訓を作って、未だにその鬱憤を晴らしている。



## 公衛研での思い出

中村 清一

昭和38年春、大学の先輩に連れられ公衛研3階に國田信治先生を訪ねた。その帰り道、何故か中島泰知先生の研究室に寄った。雑談をしていると、うちに来ないかと誘われ、そこから森之宮生活が始まることになった。その後、研究費がつき暴露装置が完成した。「体力の劣ったものは汚染大気の影響を受けやすいのではないか？」ということで、放射線を当てたマウスを窒素酸化物に暴露し、その生理活性を測定した。その研究の副産物として、墨粒子の静注でマウスが放射線抵抗性になることがわかり、放中研・武田さん等の指導を得て、昭和48年3月に阪大で学位を取得した。公衛研の仕事での学位取得第一号ということであった。その後、公衛研でも多くの人が学位を取得し、科研費の機関指定を受ける機運がたかまってきた。その頃、放中研が文部省の科研費の機関指定を取得した。そこで、放中研に足を運び申請について助言を受けた。当時の労働衛生部・石橋副部長は、度々、文部省に行き交渉に当たった。その結果、昭和57年11月に文部省科研費申請機関として地研第一号の指定を受けた。また、國田所長のお声がかかりで始まった変異原検出法の開発の成果として昭和57年10月、環境変異原学会にてumu試験を発表した。小町所長のもとでは職域、地域の健康調査、インドでの大腸がん調査など長寿社会づくり研究を行った。

研究関係以上に組合活動や趣味での交友関係で思い出深いものが多い。昭和42年のメーデーに大きな張りぼての「スモゴン」を製作した。公害問題に世間の関心が強かったこともあり、スモゴンは新聞・テレビで大きく取り上げられ、公衛研の氣勢は大いに上った。昭和44年の「平和のハト」は、メーデー終了後、府庁中庭に展示された。昭和49年には、島田さんに乗せられ組合の機関紙「しゅうかん公衛研」を発行した。その後、大石、織田、岩上さんらの協力と鋭い切込みで「しゅうかん公衛研」は充実した機関紙となった。その他、卓球場の開設、年末パーティーの開催など思い出深いものがある。当時、有志でやっていた研究会を組合と共同で組織化し、所の行事である「所内研」としたのも思い出のひとつである。また、ハイキングクラブ、魚釣りなど、多くの仲間を得た。公衛研と森之宮は大学を出てから定年までの40年近くを過ごした、まさに私の人生そのものである。私を育ててくれた公衛研の一層の発展を祈っている。

## 受動喫煙の実態調査研究と禁煙推進の間（はざま）の公衛研時代

野上 浩志

大阪府立公衆衛生研究所の創立50周年、おめでとうございます。

公害衛生室が発足したのは1971年とのことで、私が公衛研に就職する前なのですが、その公害衛生室も2003年4月の研究所全体の組織改編に伴い、労働衛生課と統合され、生活環境部生活衛生課となりました。それまで公害衛生室は5～6人の人員の一番少ない単位でしたが、生活衛生課では一気に十数人になって月1回の課員会議もにぎやかになり多様な論議ができて楽しかったです。ただ、毎年1人、2人と退職されて徐々に少なくなっていくのは寂しいことではありました。

私自身も改編3年後の2005年3月末で定年退職でしたが、再任用制度で2年間の継続雇用でお世話になりました。仕事としては室内空気汚染源のタバコ煙の人体影響の調査研究として、受動喫煙による吸入指標として尿中のニコチンとその代謝物であるコチニンを、主として高速液体クロマトグラフィーで測定分析しました。

タバコ問題、とりわけ受動喫煙問題は、基本的には社会的・行政的対策が重要で、それを裏付ける基礎的調査研究は重要ではあるでしょうが、対策とは無関係ではあり得ない訳で、それは公衆衛生の調査研究の各分野でも同じであろうと思います。ただ行政の中の研究所業務では、対策との接点を業務との関連で求めることはそれなり難しいところもあって、上司や同僚の理解で仕事として関わらせていただきましたが、禁煙推進に関わる部分は時間外にボランティアとして参加いたしました。

退職後はそのボランティア部分が一日の大半のNPO法人日本禁煙学会、及びNPO法人「子どもに無煙環境を」推進協議会の理事として、公衛研近くの小さな事務所で、禁煙推進のお手伝いをボランティアスタッフ数人の協力で進めています。交通費実費支給くらいの殆ど無給ながらも、自由な立場で「禁煙推進の仕事」に全力投入できる毎日感謝しているところです。これも公衛研時代のお蔭と感謝しております。ありがとうございました。

## 府立公衛研と私

平田 衛

私は、母校の付属病院で当時努力義務であった臨床研修2年を終えた後、1977年4月から2001年5月末までの24年2ヶ月にわたり公衛研・労働衛生部に在籍した。私の研究生活の基礎を作り、研究の大部分を占めるのは公衛研在職の時期である。

疫学研究の調査の基礎は阪大・衛生学教室で教えて貰ったが、研究方法、研究組織、動物実験から、現場調査の府の機関としての企業労使との付き合い方までを公衛研で学んだと思う。当時の大阪大学・大阪市立大学の両衛生学教室と公衛研労働衛生部の3機関を中心にしたネットワーク「労働衛生ゼミ」の存在も忘れられない。

研究の自治組織のような労働衛生部の性格は独特で、時には面倒でさえあったが、自由さは研究には不可欠であった。その自由さは研究費の無さと密接であったために、現有資源の活用、受託研究、「小判鮫的」共同研究等々、知恵を絞って工夫したものである。2001年6月に移った国の産業医学総合研究所は大違いで、頭を使うよりも金で解決しようとする人が多いのに吃驚した。

金と頭が無いのならば隙間を狙い、当たり前だが問題意識をギリギリに詰めて工夫し、アイデア勝負という気概で調査研究に取り組んだものである。その成功例が血漿鉛と鉛曝露指標の関係を明らかにした論文で、ドイツ人の知人からお褒めの言葉をいただいた。

精神衛生部の存在は、私の研究手法であった神経生理学方法に示唆を与えてくれた。逆に、故大海作夫先生（現在お嬢様が本町で開業されている）から本態性振戦の筋電図記録を頼まれたことも忘れられない。精神衛生部が移動した後、シールドルームを引き継いで、調査研究に使わせて貰った。

隣の成人病センターの人には某化学工場の発癌の疫学研究方法について以前に教えて貰ったこともあったが、宝くじ研究でトレードの形で集検1部に兼務となった。しかし、机の存在確認以外には行った記憶がない(^\_^;)。

公衛研におけるO157、PCBなどの定点観測のような地道なデータ蓄積を目の当たりにして、その重要性を知ったが、今日の論文の数と新しさだけを競う拙劣な成果主義に公衛研が冒されぬよう祈るばかりである。

## Enjoy 公衛研生活

渡邊 功

公衛研創立50周年心からお祝い申し上げます。

私は昭和48年に採用され、食品衛生部食品化学課に配属、その後、昭和59年に公衆衛生部環境衛生課へ転課し、平成21年3月に生活環境部環境水質課で定年退職いたしました。食品化学課では、國田食品衛生部長室での「フタル酸エステル分析」、児山課長の下で薬師寺・桑原・吉田(精)さん達と「母乳中のPCB調査」及び原労働衛生部長と共同の「職業的PCB取扱者調査」、環境衛生課では、田村さん、後に肥塚さんと「環境放射能調査」及び「RI管理」、鶴川・宮野(啓)・小泉・高木(総)さん達と「ダイオキシン類検査」等に従事しました。

その間、平成3年度大阪府研究職職員海外派遣により、8ヶ月間、米国の大学へ出張しました。仕事以外で研究室の皆さんからよく言われたことは「エンジョイしているか」ということです。彼らは仕事でも昼食会、余暇でもホームパーティを行う等積極的に大学生活を楽しんでいたのが印象的でした。

私は担当業務をこなしながら、愛媛大学の立川教授や榎本食品衛生部長の指導を受け、「臭素系難燃剤と臭素系ダイオキシン類調査」をライフワークとしてきました。一定の成果を得て国際会議に招聘されるなど一時的にでも国際的に評価され、国外の著名な研究者と面識を持たれたことは、私の研究生活がエンジョイできたものと確信しています。

また、織田所長主催のモーニングセミナー、キング先生の英会話教室、西村さんと昼休みの大阪城公園散歩、上司・先輩・同僚や事務の方との森ノ宮界限でのアフター5、若い頃は府庁クラブでまた後年は小西・枝川・安達・野村・倉田・藤田さん等公衛研や保健所・本庁環境衛生課の方とのバドミントン、保健所検査課の方との交流、学会先での地衛研・大学・分析機関の方との交流、環境衛生課有志の一泊旅行、親和会のパーティー、職員宅舎での山崎(謙)さん達との子育て時代も楽しい思い出です

私も長い36年間の勤務期間中には心身共に疲れた時期もありましたが上司に支えて頂き、公衛研生活をエンジョイできたことに満足しています。現役の皆様も、研究や余暇を十分「エンジョイ」され、ますますの公衛研のご発展をお祈り申し上げます。

## 公衛研の思い出

山本 康次

創立 50 周年を迎えられておめでとうございます。公衛研を卒業して 1 年になります。新しい職場で戸惑うことも多い毎日です。

大阪府の試験に受かって、公衛研に配属されるとは思ってもいなかったのが、初めて公衛研に行ったときには非常に戸惑いを覚えました。BOD、COD、浄化槽って何のことか分からない者に諸先輩方が一から指導していただいてありがとうございました。また、20 代のころには、田中さん、土井さん、中野さんらとともに勉強会をワイワイ言いながら行ったのも楽しい思い出です。

そのころ、生活排水汚染が問題となり、単独浄化槽の苦情が保健所に多く寄せられ、保健所の皆さん一緒に現場調査等を行いました。そして、大阪府では国に先駆けて全ばっ気方式の設置を禁止し、それが全国へ波及したことなど、現場の実績って大きな影響を与えることができると感心しました。

また、京都大学での研修では、平岡先生や津村先生からプロセス制御技術の研究を指導していただきました。日本で初めての窒素除去を組み入れたし尿処理施設の基本設計にも係わり、浄化槽の分野でも生物学的な窒素や燐の除去技術の開発をしていたころが最も懐かしい時代です。浄化槽の構造基準の改正に携わった時には、毎週のように東京へ行くことになり、非常にハードな時代でした。

その後、大病を患い職場の皆様には御心配とご迷惑をお掛けしましたことを改めてお詫びいたします。

また、合併処理浄化槽が恒久的な生活排水処理施設として位置づけられるようになり、設置に関して国や府の補助金が付くようになりました。さらに、将来の人口減少などを考慮して経済性を評価し、下水道事業から浄化槽事業へ変更して浄化槽面整備を行う市町村が府下でもでてくるようになりました。このような事業の環境改善効果調査を府庁、保健所、公衛研の皆さんと一緒に行ったのも楽しい思い出です。公衛研での最後の仕事は、大阪府や市町村での検討に役立てるためのコスト計算モデルを作成しました。

公衛研も大変な時代になってきているようですが、皆様の今後の研究活動に期待いたします。

## 思い出

成山 康子

公害衛生室は昭和 53 年 5 月、労働衛生部から中島室長、楠本さん、そして公衆衛生学院を卒業したばかりの都（旧姓:米川）さんの 4 人でスタートしました。

主に大気汚染をテーマに研究を続けておられたお二人が、森の宮（公衛研敷地内）の大気を吸っているマウスの解剖や目頭からの採血が、初仕事。初年度の routine work は、Cd 汚染米を保有していた農家の人々の尿中 Cd を、原子吸光分析によって測定することで、暑い盛り加熱しながらの尿蛋白分解作業は hard だったような……。2 年目からは、本格的に光化学スモッグの人体影響についてマウスを使っている研究のお手伝い……。府下の光化学スモッグ被害が、深刻になってきていました。

初めの 2・3 年は毎晩夜遅く、土曜日にも明るいうちには帰れない状況でしたが、何もかも新鮮で興味深く、お二人に励まされながら、とても充実した毎日でした。夕飯はいつもご馳走になっていましたね。

室長は新聞、TV の取材、講演依頼も多く、時に動員されました。時折、『お嬢さんですか？』と聞かれると、ニッコリうなずいて顔を見合せ……。茶目っ気のある優しく温かな父親の様な方でした。

森永砒素ミルク中毒事件の際、大阪で砒素を検出された楠本さんからは、まず、不買運動のこと、食品添加物のことを教えて頂きましたが、公私にわたり温かい心配りを今も尚、戴いております。その後、兄のような織田さんと野上さん、パートの方々も加わって、公害衛生室 family が形成されていきました。夏は大ピーカーでそうめんをゆでたり、ふ卵器でパンを焼いたり？楽しかった思い出が次々甦って、とても千字におさめられません。

私たちの母校は、当初、公衛研の 4 階にあり、多くの研究員の方が講師を兼ねられ、また、ウイルス学の実習は全学生が公衛研で受けるので、私にとって恩師がいっぱい、そのうえ田淵、宮島先輩のように知る方も多く、温かい family のような所でした。

還暦を迎える年に、この機会を戴き、我が人生を振り返るきっかけになりました。公衛研での 7 年間は、知的な興味を満たしてくれる環境と、温かい沢山の方々めぐり会え、育てて戴いて、私の人生の基盤となりました。また、退職後、すし屋を開業して 32 年になりますが、未だに当時の職員の皆様にご利用頂いている事に、深く感謝すると共に、幸せを感じております。

只、同輩の油田君、中島室長、お店の常連さんでヒマラヤ登山までされていた布浦さんが、若くして故人となられたことが、とても残念です。排気ガスだ、NOx だ、マスク法だ、と大騒ぎだった自動車も、今や電気で動く時代となりました。変化していくテーマと共に、今も、切磋琢磨なさっている皆様の姿が目には浮かびます。